大原家藏雪舟筆山水圖に就いて

熊谷宣夫

詩畫軸としての雪舟の作品は、多數の傳稱作品の中にあつてむしろ少數である。更にその傳稱を冠する詩畫軸中信用しうべきものは、

帝室博物館藏　付與宗淵山水圖

大原孫三郎氏藏　山水圖（本號圖版第三、第四）

に止まる。管見によれば、從來有名なる漁樵齋圖、晴雪齋圖の如き現存のものは明かに摸本である。

註一　漁樵齋圖は

題漁樵齋

畫師雪舟游方于大唐々々國裏之風煙」潤色其筆剩分天童第一座歸日域片楮（カ）」寫山水則某山某水四百州與六十州山」河無隔碍光明處々通或作齋軸請齋」名以漁樵而題一詩云

拾異釣奇開此圖千山影落一江湖畫詩」肝肺吐雲水眞樂漁樵何處無

永正壬申春二月日」相鎌府沙門英璵九々歳書于玉澗下

と題せられるもので、現在故竹添履信氏舊藏及び根津嘉一郎氏藏品があるが、前者絹本墨畫、後者紙本墨畫何れも題贊は玉隱英璵の書蹟に非、畫又雪舟と認め得ない。

註二　晴雪齋圖は

晴雪齋

推戸初驚暮雪晴」孤峯不白片雲横」虚簷滴作同參雨」添得鼇山連叫聲

延德庚戌仲冬」默雲天隱叟龍澤

清齋四面絶塵緣好雪晴時」一色邊把筆圍爐中下等」白頭山裏白頭禪

宜竹景徐周麟

とあるもので、特に後者の翰林葫蘆集第七卷には晴雪齋記あるに參照せられるが、松方公舊藏品は贊畫共に摸本とせられてゐる。

蛇足を添ふれば東洋美術大觀に紹介せられた志方勢七氏及び宅德平氏藏品は現在その再檢討を要すべきものとして考へられる。

註三　志方氏藏品には

青山疊々水重々」萬里來同棐几中」不用區々飛杖錫」臥遊奇勝飽無窮

（印一）（印二）（印三）

淋漓元氣出自毫素峯巒競秀」滄波浩渺石頑而稜木老而陰」谷有紫芝洞饒□林仁智之資」樂此外無衡茅幽（カ）廬來東海隅」油其微痕玩此清□敬題贊辭」愧乏黄絹

（印一）（印二）（印三）（印四）

とあつて、前者の印一は「廣陵（カ）世家」、印二は文不明、印三は文不明、後者の印一關防は文「□原朴氏」、印二は「朴氏衡（カ）文奎甫」、印三は「菊逸」、印四は「溪山幽趣」と讀まれ、又前者印三の鼎形も朝鮮に普通な形式で、贊者は半島人であること推知し得るのみで、その考證は雪舟關係史料として、果して雪舟畫か否かを別問題としても興味多きものであり、茲に注記するを要する後日に俟つ一問題を提供してゐる。

註四　宅氏藏品は

雪擁諸峯玉倚空想應詩思屬漁」翁吳山稍遠灞橋近併置笠簷箕」袂中

雪樵老衲景莅　（印）

風雪山深迄一冬溪橋初見往來」蹤主賓不語共欹耳松答飛泉々」答松

默雲天隱龍澤（印一）（印二）

とあつて前者は蘭坡景莅、印鼎形朱文蘭坡、後者は天隱龍澤、所捺印一圓印朱文龍澤、印二方形朱文天隱であり、共に雪舟の同時代に詩僧として有名であり、その著贊の畫軸も多い。

（上及左）

牧松周省贊詩印記

（原寸）

要するに特に雪舟の雪舟たる完成を明示する山水畫に限定した場合、冒頭標示した二詩畫軸を、その明白な雪舟畫として言及する附帶の題贊に依つて、最も信憑すべき作品として先づ撰定すべきは論なき處である。

帝室博物館藏品は周知であり今更にその解說を要しない。

註五　詳細な考證としては、例へば雪舟自題の關防は脇本樂之軒氏によれば古銅印の使用であると云はれるが、之に就いて何等他に言及なき等猶ほ今後の研究の出發點たるべき要素は之が第一標準作に列するが故に多少ともあれ含むものである。

夫に比すればこの大原氏藏品は既に再三の美術史上の紹介はあるが比較的世人に親しみ少い。敢へてその先蹤を追うて、縷說を繰返すことも徒爾としない。

この題贊を再錄すれば

（印一）

嶮崖徑折繞羊腸白髮蒼頭步似徉舊日常村

枯竹短前朝蕭寺老松長東漂西泊舟千里

北郭南涯夢一場我亦相從欲歸去青山

聳處是家鄉　牧松周省書

（印二）（印三）

（印一）

詩畫尋常欲遣情人間何地卜長生層巒疊嶂

劍鋩矗極浦廻塘屏障橫徑路岩隈蟠

繚繞樓臺樹蔭聳崢嶸牧松遺韻雪舟逝

天末殘涯春夢驚　永正丁卯上巳前一日

大明皇華前南禪了菴八十三載書于雲谷寓舍

（印二）（印三）

とある。

牧松周省の印一關防は「遊戲翰墨」長方形白文、印二は「長松」印三は「以參周省」と讀まれる。卽ち上村觀光氏五山詩僧傳別稱室號に以參省牧松とあるに相當すべき僧である。前述印文により明白である。かの翔之恵鳳がその西遊集に

寄省藏主

牧松翁視佩弦。於族譜爲諸父行。予昔在洛社知之。佩弦室中今薙后於南豫州戰壘之下。霄燒木頭而話。時予方將檀命。牧松自幕中到。作之

爲笑。牧松。省禪之號也。

順世緣時便逆緣。篙々著力始行舟。虛空昨夜開眉日。可被靑山笑白頭。

と見え、その序文は考證未詳ながら牧松周省に關する最も具體的な傳記史料であらう。卽ち、翔之惠鳳の周防行寛正五年冬、その在世は寛正六年を以て限定せられる限（上村氏五山詩僧傳同人條參照）この文獻の成立年代も略々確定し、先づ牧松周省の在世年表上の一支點を知られる。更に惠鳳翔之の同文集には雪舟に關して

寄楊知客并序

以下數個の史料を共在して、こゝに惠鳳翔之の交友關係中に牧松雪舟共に包含せられ、然かも前述の文獻亦地方的に西國關係を明示して更に兩者にも交遊あることを推知せしめる。殊に僧にして戰場征行に加はる情勢は當時の世相をよく物語る所、雪舟が明應八年十一月廿二日付付與宗淵尺牘に宗淵に關して云ふ處と同じく、亂裡に生存した禪僧の面影を傳へる。猶ほ牧松周省傳については井上蘭崖氏の「牧松周省と大內氏」（日本美術協會報告第十七輯所揭）に詳しく文明十六年十一月二十七日陶弘護畫贊によつて同時までの在世を確められて居る。

（上）及（左）了菴桂悟贊詩印記（原寸）

一二

然かも、古來畫傳に牧松を以て畫僧として記錄し、現在、慈照院藏達磨像には「牧松」印一顆あつてその作品と認定せられる。

雪舟款印（原寸）

註六　國寶全集第五輯參照

故國迢々香至象」普通年後其生涯」分張骨髓與皮肉」昨夜寒梅放出花

宜竹景徐叟（印）

とあつて、この詩は景徐周麟の翰林葫蘆集に收錄せられる。これに所捺の「牧松」印記は特殊な方形重廓白文であり、この大原氏藏品贊所捺の「長松」印記とは一致しないが、之も信じ得べきものとせられる。

猶ほ、牧松印と傳稱せらるるものに、建長寺藏三十三觀音像所捺のものを原型とすると推定せらるるものがあるが、之は全く混同に禍された結果と考へられ、牧松周省所用と隔離すべきであらう。

かくこの像の景徐周麟贊の所在は、景徐周麟對雪舟の關係に竝行して居り、こゝに重ねて雪舟、牧松が同時代人、親近な環境にあるこ

とを意味する。卽ち雪舟畫牧松贊の此幅の存在理由に裏書する處がある。

更に牧松が畫人としての一面は前述達磨像を以て充分に闡明せられ、畫人雪舟と同一なる文化の荷擔者たるべき禪僧の教養に缺くところなきを表明し、益々兩者を近接せしめるを感ずる。姑らく詩人としての兩者は殆んど同時代の禪僧として洩れなきものであると云に止めても、この畫人たる共通性は注記を必要とすべきを思ふものである。

拙くも牧松周省傳の素描を成して、その輪廓は未だ不明なるに委ねねばならない。しかしこの幅に著贊する處、雪舟の東漂西泊の生活、而かもその適應の安住地は自然を意味し、且つその自然の藝術的再現たる山水に最後の目標を求め意味を汲取るに充分であり、又牧松自身もこの幅に對して自己の故郷を雪舟と同じき追從の心情を吐露して居る。この詩畫は兩々相俟つて安住しがたき現世と永遠の山水に終始する欲求を唱和するとしやう。かくておそらく周防に多く在住したと考へらるる二人の事情よりして、その詩畫は相接した時日と場所に成立したものと認められる。

その時代は先づ共在する了菴桂悟贊の年記永正四年に近く寄せて考へられ、牧松、雪舟の關係は前述の如く寛正末年より考へ得るとしても、その時代の雪舟畫の標準なく、且つ景徐周麟關係より兩者の關係の持續は後年に到る迄立證しうべく、又この雪舟畫としての樣式がかの山水長卷文明十八年自署あるものに近接する位置にあつて尠くとも、牧松の在世を可能の事實として雪舟晩年の製作とするを常識としやう。

註七　景徐周麟の翰林葫蘆集には雪舟に關しての記述に

題楊知客畫二首（一首前掲晴雪齋圖題詩）

題畫　何處寒江辨雪舟

題畫　寄語天涯楊雪舟

題淵藏主詩畫後

等があり、比較的雪舟晩年の關係たるは推定し得る。

了菴桂悟は五山詩僧として既にその名は喧傳せられ、今是にその傳記に就いて詳述を要しない。更にその雪舟との交際に就いても、次いで本誌に於いて詳述すべく文明十八年に周防に到り雲谷菴に雪舟を訪ひ、彼の爲に天開圖畫樓記を作ることを以てその親しさは十分に立證せられる。且つこの詩軸に於ける著贊の事實はこの關係を更に緊密ならしめてゐるのみに止まらず、雪舟に關する彼の自筆文獻史料としては唯一なるものとしての遺存である。

註八　國賓として周知なる傳雪舟筆東福寺伽藍圖には了菴桂悟自筆の題文を繼ぐが、その題贊に雪舟畫としての言及なく、且つその畫の克明さは雪舟畫とは別途の個性を示して雪舟畫としては否定せらるるを通說とする。

その贊中「牧松遺韻雪舟逝」の一句があり、この年記永正四年には先に著贊したる牧松周省、畫者雪舟の既に逝去せることを示す。牧松周省の歿年不詳なるも玆に一限定せられ、雪舟の歿年は通常永正三年八月八日として古畫備考に掲げらるるを信ぜられて居るが、この了菴に據る限定は確かに永正三年を指示しないまでも、夫に近きを意味する。殊に「天末殘涯春夢驚」との最後の一句の語氣もこ

れら牧松、雪舟の死を周防に到り知りたるを意味する。而かも了菴桂悟が贊尾に明に「于雲谷寓舍」としてその場所をも記すことは、雪舟と雲谷の關係を益々緊密ならしめる處がある。卽ち次回論文に於いて雪舟の歿地に對して通說なる石見益田を否定せんとし、雪舟の放浪の性質と事實を認むるとしても、その本據は周防雲谷たるは確認し、引いてその終焉地としてもこの地が有力なるを思ふものである。卽ちこの了菴の題贊の云ふ處、雪舟の死を知り、その最も親しかりし地に於いてその製作に記念と追悼の辭を著けるに外ならず、而かも他にその死せる場所に言及なきは通常に解すれば當然この雲谷たるべきを妥當とする。

註九　雲谷と雪舟との關係は既に惠鳳翔之の竹居淸事西遊集に於いてその居所號として雪舟の代稱としてゐるが、その時代には他に雲谷を以て呼ばる人を見出す。卽ち同集晦菴說に見られる。しかし時代の下降と共に雪舟卽雲谷として呼ばるは季弘大叔の蔗軒日錄文明十八年三月十二日條、桂菴玄樹の島隱漁唱等通途に使用せられてゐる。この關係に於いて雪舟の本據として雲谷は十分な立證を伴ふものである。又既に東山水墨畫集第十一輯解說にて言及せし如くこの永正四年の了菴桂悟の周防行は入明の爲に到り果さざりし時であり、その雲谷訪問は元方宇說を同じく雲谷に於いて殘せる事實を上村觀光氏禪林史譚に指摘せられ、十分なる傍證を伴ふものである。

かくて前述の如くこの畫軸は雪舟晩年の製作として而かも雲谷菴に卽するものと解釋せられる。

註十　國寶全集第七十輯に中野忠太郎氏藏山水圖に惠鳳翔之贊と認められ、引いて雪舟の入明以前の製作かと擬定せられてゐるのは、この畫軸に對する從來の漠然たる周文說に對して啓蒙せらるる處大である。而してこの畫幅に存する印記は或は「天遊」と判讀せられ、時代を以てその人を擬するならば天遊爲潘があり、寬正六年大內氏を嗣ぎたる政弘の知遇を得て居り、その場所の關係よりしても國寶全集の雪舟說に近付き、雪舟畫とすれば雲谷菴最初期時代に擬定し得べきものであらう。實に同一印記をもつものに高田愼藏氏舊藏の傳周文筆山水圖がありその水墨畫樣式は共通するもの、同一筆と認定せられるものであるが、無款であり尠くともその樣式は雪舟として許さるべきかは能く論定し得ぬ處である。卽ち、その史的條件はこの牧松、了菴贊山水圖と同じく場所時代關係を限定しうべくして、その理由はやゝ薄弱であり、且つその雪舟畫としての比較に於いても兩者間には相當の距離がある。唯その相似た條件を具ふるが故に敢へて付記する處である。

かく了菴桂悟贊は雪舟畫乃至その人に及んで重要な暗示を含む處である。加ふるに自身の書蹟としても關防（印一）「桂綠齋」、印二鼎形朱文不明、印三方形白文「了菴」を伴ひ、特にその關防の如き他に例を知らず、而もその齋名として解し得るなど、貴重なる史料たるを付言し得やう。

雪舟畫としてその落款「雪舟筆」印章方形白文「等楊」は普通のものであるが、その普通なる多數のものの中に眞に的確な遺例はむしろ求出で難きが雪舟研究にいとはしき煩雜さを來す今日信憑しうる一の貴重な例とすべきものである。かく雪舟畫としての十分な史的傍證は、この山水の翫賞に關しての準備的智識にすぎない。一旦この畫面に對してはこれらの立脚地の上に自由な雪舟畫の把握は人夫々の心情に卽してなされなければならない。蛇足を加ふれば、現在の常識たる雪舟畫の分類、眞、行、草の山水畫中その眞山水の一例である。信ずべき眞山水としては毛利公藏の山水長卷、曼殊院藏夏冬山水、淺野侯藏仿夏珪夏冬山水或は金山寺育王山圖等があり各そのやゝ異つた作品自身の持味がある。

註十一　この眞山水として大正震災に燒失せる鎭田瀧圖の如きその題名の示す實景圖として明瞭な作品で、その印象は諸先輩の傳へる處、雪舟畫としての諸性質をよく具備すると云ふ。（後素遺芳のリプリント參照）

かく眞山水中に伍しては、この詩畫軸は最も山水長卷に近く、長卷が文明十八年に定位せしめられる時、この製作が晩年たる事は前述の諸理由と一致する處である。むしろ山水長卷はその畫と落款の間紙繼ぎありてその解釋に苦しむ時、この詩畫一紙なるこの一軸の存在價値は高く評價せられねばならない。こゝに從來の最大傑作とせられた長卷に對する再檢討を敢てするならば重要なる支持點をこの大原氏藏品に求めらるるに非るかと私考せらるるものである。

圖は明確な水平線を劃してゐる。この水平線の意識は先づ圖を安定ならしめ之を基準として前景に幾多の物象を疊む、この極限せられた遠さまでに到すべく、觀者は疊まれた物象の自然の間を彷徨し、脇本氏が「迷遠」として海彼岸の三遠の思想に對して雪舟の觀念を名付けられたるごとく迂餘曲折の途を辿り、そこには有機的に行動の感、引いて精神的に努力感の後味を體驗しやう。かくて前提せられた地上の限界に達しうるものに更に天開海濶の空間を仰がるであらう。そこに無限の感慨は渺然として禁じ得ない。この有機的な感覺はたしかに雪舟の秀れ他の山水畫家に殆んど見得ない特徵である。而してその有機的感覺はかく行動的に由來するもののみならず、その山水のもつ雰圍氣の說明に眞實さをもつことも雪舟畫のよき一つの個性である。卽ちこの圖に於ける例へば瀨戸內海をモデルとせる如く想像せられる溫暖或は明朗な雰圍氣は雪舟によるロカァルな風景の客體性の捕捉であり、かの山內侯藏天橋立圖に於ける曇つた冷さと對比して、その振幅の廣さと雪舟の畫家としての眼乃至感覺的の秀れたセンスに畏敬の念を捧げられやう。

この感性的側面に秀れた表現は、室町時代を通じて否なその以後の山水畫家と雖もその取扱が主觀的な統理に傾き、山水を借りた自己の世界觀、狹く眼を塞いだ自己の自然觀に過ぎないのに比して豐富な印象的要素をもち、普遍的に一般をその感性的側面より誘導して難解とせらるる山水畫の境地に入らしめる契機を與へてゐる。雪舟の偉大さはこの解し易き感性的要素の確實な再現の上に更にその統制を緊密に持しつゝ、遠なる一つの山水畫の理想に到達し、而かも翫賞的立場にあるものをも容易に之を指導し引きつれて行く處にある。

圖に對しておそらく學び得ないと思はるゝ筆致、事實は然らずとしても、上手としての技術的感銘を受けるに先立つて、かゝる最も本源的なシンパセティクを感ぜざるを得ないであらう。そこに雪舟の人間的な活動としての製作がある。かくして容易に雪舟を論じ盡し得たりとすれば冒瀆にすぎないが、この雪舟研究の最も重要な一作例を紹介するに當つて些かその一解釋を提示するに留めやう。